

医療タイムス

週刊医療界レポート

2015.3/16 No.2199

特集

「医療事故調を医療安全につなげるために」 第4回医療事故調シンポジウムから



タイムスインタビュー

厳しさを増す医療経営環境
患者満足度の向上が鍵

医療法人社団南星会理事長
有限会社SEM medical solution代表取締役

島田栄治氏

ケーススタディ経営改革力

地方独立行政法人神戸市民病院機構の取り組み
患者サービスの向上と経営の効率化を図り経営改善
地方独立行政法人神戸市民病院機構

Top News

消費税率引き上げの補填率を調査 四病協など
医療保険制度改革関連法案を閣議決定 政府



長尾和宏の 死の授業

長尾和宏 著
四六判156ページ
定価1200円+税
►ブックマン社
☎03-3237-7777

文●田川丈二郎

日常生活の中で、ここまで死について語り合う場はなかなかないだろう。参加した若者たちが、反発し、疑問を投げかけながらも、安楽死、尊厳死の理解を深める様子に希望を感じた。

は、日本の若者たちと3時間にわたり死を語り合った。建て前も立場もなく、真剣な対話であったという。本書はその模様をあまさず網羅しているが、タイトル通りに、著者を先生とする「死の授業」となった。そこでは現代日本人の死生観が凝縮されている。

国策として在宅医療を推進している現在、必要とされているのは死生観の醸成だろう。地域で、病院で、施設で生き死にというものを見劍に考え、真摯に捉えていくことが求められているのだ。

「終末期と医療」「平穏死」(尊厳死)

に関する著作を多く上梓してきた著者

から著者は、日本において「安楽死」「尊厳死」「平穏死」とは何かを確認するのだが、実はこの3つの死のタイプを明言できる医師、ジャーナリストはほとんどいないのが現状なのだという。

また余命宣告について論議が及ぶ。著者は、本当はもっと生きられるかもしれないのに「あと半年」と宣告をした途端に、力が抜けて生きる気力を失う場合も多いと指摘。それゆえ、簡単に余命宣告をするべきではないという。その前提として著者は、本来死とは「待つ」ものであつて、いつ死ぬか、どこで死ぬかをコントロールしようとするのは人間のエゴイズムでしかないと語る。つまり本来、死は死でしかないのだが、終末期医療の在り方を論議するために「安楽」「尊厳」などの形容詞を付けているのにすぎないというのだ。

冒頭、昨秋に話題となつた29歳アメリカ女性の安楽死報道を取り上げる。そこには、本書の死の授業でも取り扱われた内容である。そこで、本書の死の授業でも取り扱われた内容である。